

平成 18 年度卒業試験（第 3 回）

1. 32 歳の女性。2 ヶ月間の無月経を主訴に来院。初経は 12 歳、月経周期は不規則であった。妊娠反応陽性を確認し、最終月経起算にて妊娠 8 週 4 日であった。経腔超音波検査で子宮腔内には胎嚢は確認できなかった。この患者に行う処置として適当なのはどれか。2 つ選べ。

- a 経過観察
- b 尿中 hCG 測定
- c 子宮内清掃術
- d 胸部 X 線撮影
- e 骨盤血管造影（PAG）

2. 25 歳の未産婦。不妊を主訴に来院し、hMG-hCG 療法にて妊娠成立し、妊娠 5 週にて胎嚢を 3 個認めた。この患者に単胎妊娠に比べて今後合併する可能性が高いのはどれか。2 つ選べ。

- a 胎児貧血
- b 羊水過少
- c 早産
- d 常位胎盤早期剥離
- e 前置胎盤

3. 26 歳の初産婦。妊娠 28 週の妊婦健診にて子宮底長 18cm であった。腹部超音波検査にて羊水過少を指摘された。羊水過少の原因として考えにくいのはどれか。

- a 前期破水
- b 腎無形成
- c 尿道閉鎖
- d 尿路閉鎖
- e 食道閉鎖

4. 32歳の女性。結婚後5年間の不妊を主訴に来院。不妊原因の検索のために腹腔鏡検査を施行した。腹腔鏡検査の所見（別紙写真 A-31）を別に示す。この患者に対する適切な治療方針はどれか。2つ選べ。

別 紙  
腹腔内癒着所見

- a 体外受精・胚移植
- b 人工授精
- c 癒着剥離術
- d hMG-hCG療法
- e Kaufmann療法

5. 32歳の女性。月経痛、性交痛を主訴に来院した。内診所見で、子宮は正常大、可動性不良。ダグラス窩に硬結を触知し圧痛を認め、付属器に手拳大の可動性不良の腫瘤を触知した。CA125は120IU/L（正常65未満）であった。骨盤MRI所見（別紙写真 A-32）を別に示す。最も考えられるのはどれか。

別 紙 MRI  
T1:high, T2:high の卵巣腫瘍

- a 奇形腫
- b チョコレート嚢胞
- c ルテイン嚢胞
- d 粘液性嚢胞腺腫
- e ブレンナー腫瘍

6. 39歳の女性。4回経妊3回経産。無月経と持続する悪心とを主訴に来院。最終月経起算にて妊娠10週3日である。腹部所見および経腹超音波断層所見（別紙写真A-33）を別に示す。この患者に対して必要のない検査はどれか。2つ選べ。

別 紙

腹部膨満で砂嵐様の腫大した子宮の超音波所見

- a 胸部 X 線撮影  
b 血圧測定  
c 尿検査（蛋白尿検査）  
d 血中 $\alpha$ フェトプロテイン測定  
e 骨盤単純 CT
7. 56歳の女性。閉経は52歳。不正出血を主訴に来院。子宮体部細胞診陽性にて子宮内膜掻爬術を施行した結果、組織診にて類内膜腺癌、Grade 2であった。骨盤 MRI にて腫瘍の筋層内浸潤は認めず、腹部 CT にてもリンパ節腫大や遠隔転移は認めなかった。また、他に合併症は認めなかった。この患者に対する治療の第一選択はどれか。
- a ホルモン療法  
b 放射線療法  
c 化学療法  
d 手術療法  
e 温熱療法
8. 通常の妊婦健康診査に含まれていないのはどれか。
- a 血圧測定  
b 体重測定  
c 尿蛋白検査  
d 子宮底長測定  
e 頸管長測定

9. 32歳の未婚女性。月経周期は28日型で順調。3ヶ月前から不正性器出血と軽度の下腹痛があり、来院した。内診所見：外子宮口は開大し、そこから径3cmの赤色で表面平滑な硬い球状腫瘤が突出し、子宮頸部は非薄短縮、子宮体部の大きさ、形、硬さは正常で両側付属器に異常はない。考えられるのはどれか。

- a 子宮頸管粘膜ポリープ
- b 子宮腔部びらん
- c 子宮内膜ポリープ
- d 子宮筋腫
- e 子宮頸癌

10. 32歳の初産婦。妊娠前より糖尿病を合併しておりインシュリン療法を行っていた。羊水過多を認め、妊娠39週1日にて4100gの男児を分娩した。胎盤娩出後から出血が持続し、顔面蒼白、脈拍数100回/分、血圧75/40mmHgであった。最も考えられるのはどれか。

- a 子宮破裂
- b 弛緩出血
- c 頸管裂傷
- d 子宮内反症
- e 羊水塞栓

11. 子宮を直接支持する 装置でないのはどれか。

- a 基靭帯
- b 円靭帯
- c 仙骨子宮靭帯
- d 卵巢固有靭帯
- e 骨盤漏斗靭帯

12. 必ずしも 性行為感染症でない のはどれか。

- a クラミジア子宮頸管炎
- b 性器ヘルペス
- c カンジダ膣外陰炎
- d 梅毒
- e 膣トリコモナス症

13. B型肝炎合併妊娠について 誤っている のはどれか。

- a 児への感染を予防するために帝王切開術が推奨される
- b 新生児に対してガンマグロブリンの投与が行われる
- c 新生児の感染予防対策としてワクチン接種が推奨される
- d 母乳栄養を中止する必要はない
- e 母体の HBe 抗原が陽性の場合児への感染率が高い

14. 切迫早産の診断・予知に 有用でない のはどれか。2つ選べ。

- a 子宮頸管長
- b Bishop スコア
- c 子宮頸管・膣分泌物中癌胎児性フィブロネクチン濃度
- d 母体血中 hPL 測定
- e 尿中エストリール測定

15. 無月経の鑑別診断に 有効でない 検査はどれか。

- a ゲスターゲン療法
- b Kaufmann 療法
- c Rubin 検査
- d 血中プロラクチン値測定
- e 子宮卵管造影検査

16. 子宮体癌について 誤っている のはどれか。2つ選べ。

- a 症状として過多月経を訴えることが多い
- b 未婚、未産婦に多い
- c やせが危険因子である
- d 組織型は類内膜腺癌が多い
- e 最近増加傾向にある

17. 癒着胎盤の 危険因子でない のはどれか。

- a 人工妊娠中絶術後
- b 帝王切開術後
- c 前置胎盤
- d 卵巣腫瘍核出術後
- e Strassman 手術後

18. 更年期障害に対するホルモン補充療法の絶対的禁忌と考えられるのはどれか。2つ選べ。

- a 高コレステロール血症
- b 血栓症
- c 子宮頸癌術後
- d 乳癌術後
- e 糖尿病

19. 原発性無月経の原因部位として最も多いのはどれか。

- a 視床下部
- b 下垂体
- c 副腎
- d 卵巣
- e 膣

20. 子宮収縮抑制薬として用いられるものはどれか。2つ選べ。

- a 塩酸リトドリン
- b インドメサシン
- c カルシウム拮抗薬
- d 硫酸マグネシウム
- e ニトログリセリン

21. 臍帯下垂の原因として 誤っている のはどれか

- a 横位
- b 骨盤位
- c 狭骨盤
- d 羊水過多
- e 前置胎盤

22. 変動一過性徐脈に対する処置として 正しくない のはどれか。

- a 母体の体位変換
- b 内診
- c エフェドリンの静脈内投与
- d 子宮収縮抑制薬の投与
- e 人工羊水注入

23. Apgar スコアの 評価項目でない のはどれか。

- a 呼吸
- b 皮膚色
- c 筋の緊張
- d 大泉門の緊張
- e 心拍数

24. 排卵日の推定法として 誤っている のはどれか。2つ選べ。

- a 頸管粘液検査
- b 超音波検査による卵胞径計測
- c 尿中プロラクチン測定
- d 尿中 LH 測定
- e 血中プロゲステロン測定

25. 卵巣過剰刺激症候群の治療で 誤っている ものはどれか。2つ選べ。

- a アルブミン投与
- b hCG 投与
- c 電解質輸液
- d ガンマグロブリン投与
- e ドーパミン投与

26. 婦人科悪性腫瘍のスクリーニングに細胞診が最適なのはどれか。

- a 外陰癌
- b 子宮頸癌
- c 子宮体癌
- d 卵管癌
- e 卵巣癌



27. 28歳の初産婦。妊娠36週0日に胎動減少を主訴に受診した。子宮口は1cm開大、展退度30%、先進部は児頭であった。胎児心拍数陣痛図（NST）所見を別に示す。40分間記録し、さらに児に対してVAS（音響振動刺激）を加えたが、さらに40分間、所見は同様であった。この患者に行うべき処置はどれか。



- a 誘発分娩
- b 緊急帝王切開術
- c 1週間後にNST再検査
- d 24時間後にNST再検査
- e CSTを行う

28. 40歳の女性。腹式子宮全摘術を施行した。術後、手術所見（別紙写真 F-25）を別に示す。この疾患について誤っているのはどれか。2つ選べ。

別紙  
子宮筋腫の写真

- a 漿膜下に病変がある場合に他の部位に比べて症状が出現しやすい。
- b 悪性疾患との鑑別にLDHの測定が有用である
- c 挙児希望のある症例であればGnRH療法が第一選択の治療となる
- d 粘膜下の病変に対しては子宮鏡を用いて治療することがある
- e 閉経後にはこの病変は縮小する

29. 28歳の未産婦。24歳、25歳、27歳時に妊娠初期の流産を認め、精査を希望して来院した。原因検索を行ううえで必要のない検査はどれか。

- a 子宮卵管造影検査
- b 血中プロラクチン値測定
- c 染色体検査
- d 抗カルジオリピン抗体測定
- e Rubin 検査

30. 28歳の未産婦。性交後に出血を主訴に来院した。子宮頸部細胞診がクラスⅢaのため、陰拡大鏡診を行ったところ別に示す所見が得られた（別紙写真 F-27）。次に行うべき検査・処置で適切なものはどれか。

別 紙 モザイク・白色斑の所見
--------------------

- a 子宮頸部内膜擦過細胞診
- b 狙い組織診
- c 子宮頸部円錐切除術
- d 単純子宮全摘術
- e ヒステロスコピー

31. 32歳の4回経産婦。自然分娩で3700gの男児を出産した。胎盤を牽引して娩出させた。直後から性器出血が持続し、その後強度の下腹部痛を訴え、意識は清明であるが、表情は苦悶様、脈拍 96、血圧 132/88、触診で子宮底を触れず。腔鏡診で腔内に腫瘤様のものを認める。まず行うべき適切な処置はどれか。

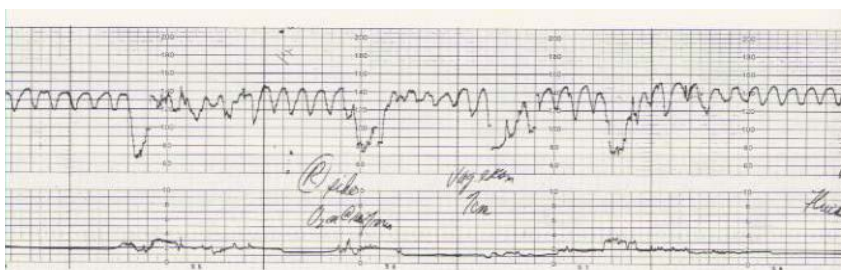
- a 全身麻酔下整復術
- b 筋腫核出術
- c 頸管裂傷縫合術
- d 開腹手術
- e 双手圧迫術

32. 30歳の女性。初経は12歳。初経以来の月経不順があり、3年前に結婚したが不妊のため、挙児希望を主訴に来院した。内診所見で子宮は正常大、両側付属器は軽度腫大し、経膈超音波断層法にて別に示す所見が得られた（別紙写真 F-29）。この患者に対して考えられる治療はどれか。2つ選べ。

別 紙  
ネックレス状の卵巣

- a Kaufmann 療法
- b クロミフェン療法
- c ブロモクリプチン療法
- d ゴナドトロピン療法
- e ダナゾール療法

33. 29歳の女性。妊娠36週にて受診時の胎児心拍数陣痛図（別紙図 G-28）を示す。この児の状態と 関連の少ないのはどれか。2つ選べ。



- a 母体の間接クームス検査陽性
- b 母体の糖尿病合併
- c 母体の腹部打撲（交通外傷）
- d 母体の ITP（特発性血小板減少紫斑病）合併
- e 臍帯断裂

34. 34 歳の女性、無月経と全身倦怠感を訴えて来院した。3 年前第一子分娩時に弛緩出血のため輸血を行った。産褥期の乳汁分泌も不良でその後無月経である。最近、体動時に易疲労感がある。また、第二子を希望している。この患者に適切な治療はどれか。

- a エストロゲン
- b クロミフェン
- c ブロモクリプチン
- d ゴナドトロピン
- e LH-RH

35. 38 歳の女性。3 回経妊 3 回経産、避妊方法の相談にて来院した。血栓症のためワーファリン内服の既往がある。避妊方法として 不適切なのは どれか。

- a コンドーム
- b 子宮内器具
- c 経口避妊薬
- d 精管結紮術
- e 卵管結紮術

36. 34 歳の女性。未経妊、下腹部痛および不妊を主訴に来院した。下腹部痛は月経時以外にも自覚し、性交痛も自覚していた。結婚後、3 年間避妊しなかったが、妊娠に至らず。近医で施行した夫の精液検査には異常を認めなかった。内診にて左付属器に腫瘤を触れ、圧痛を認めた。経膈超音波検査にて左卵巣は径約 6cm 大に腫大し、内部は均一な高輝度エコーで占められ、充実部分は認めなかった。この患者に適切な治療はどれか。

- a 腹腔鏡下手術
- b GnRH アゴニスト療法
- c 経口避妊薬
- d 体外受精・胚移植
- e Kaufmann 療法

37. 30歳の女性。5年間の不妊を主訴に来院した。月経は不順であった。内診で子宮は正常大であったが、超音波検査所見で子宮内膜の肥厚を認め子宮内膜組織診で子宮内膜異型増殖症と診断された。この患者に適切な治療はどれか。

- a 単純子宮全摘術
- b GnRH アゴニスト療法
- c 黄体ホルモン療法
- d エストロゲン補充療法
- e 広汎性子宮全摘術

38. 次の文を読み、問いに答えよ。

29歳の初産婦。妊娠30週に腹部膨満感と呼吸困難感とを主訴に来院した。

月経歴：初経13歳、周期は35～60日型、不規則であった。

現病歴：28歳時に、月経不順ならびに結婚後2年間の不妊を主訴に来院した。初診時の内診所見で子宮は正常大にて両側付属器にも異常は認めなかった。経膈超音波検査にても異常は認めなかった。夫の精液検査も異常を認めなかったが、Huhnerテストは不良であった。基礎体温にて2相性であったが、高温相が8～10日程度であり、1相性を呈することもあった。血中プロラクチン濃度は正常で、LH-RH負荷試験も正常反応であった。性交後検査および子宮卵管造影検査でも異常は認めなかった。不妊治療の結果、妊娠反応が陽性となり、基礎体温における排卵推計から妊娠7週で受診した際の経膈超音波検査写真（別紙写真I-20）を別に示す。妊娠26週の定期健康診査までは、異常は指摘されていなかった。1週間前から腹部膨満感を自覚していたが、放置していた。昨日より呼吸困難感も出現したため、不安となり受診し、入院となった。

現症：意識は清明、身長160cm、体重65kg（妊娠中の増加12kg）、体温36.5℃、呼吸数20/分、脈拍86/分、整。血圧125/76mmHg、胸郭に異常なく、下腿に軽度浮腫を認める。

子宮底長42cm、Leopold触診で第一児は頭位、第二児は骨盤位であった。第二児の胎動減少を自覚している。膈鏡診では異常認めず、内診でも子宮口は閉鎖している。

検査所見：尿所見：蛋白（-）、糖（+）。血液所見：赤血球368万、Hb10.8g/dl、Ht33%、白血球12000、血小板28万。



①この患者に対する不妊治療として最初に行うのに適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 腹腔鏡検査
- b 人工授精
- c クロミフェン療法
- d 体外受精・胚移植
- e 通水療法

②この双胎妊娠で正しいのはどれか。

- a 無絨毛膜 1 羊膜
- b 1 絨毛膜 1 羊膜
- c 1 絨毛膜 2 羊膜
- d 2 絨毛膜 1 羊膜
- e 2 絨毛膜 2 羊膜

③入院時に考えられるのはどれか。

- a 切迫早産
- b 頸管無力症
- c 双胎間輸血症候群
- d 妊娠高血圧症候群
- e 切迫子宮破裂